人権ほっと30年３月号

『『いじめ』をのりこえる鍵』

大阪教育大学特任教授
島　善信

先日、筆者の受け持つ後期授業が終わりました。この授業では、人権問題を様々なテーマで考えてきました。

授業の最初に、毎回５人ずつ１分間スピーチを求めています。テーマについて、はじめは「この１週間の出来事から」とし、途中からは「人権について考えたこと」としました。授業の最後には、これも毎回コミュニケーションカードへの記入を求めています。その内容をまとめて次の授業で通信として配布しました。

１分間という限られた時間のなかで、またコミュニケーションカードを通して、学生たちは様々に語り、書き始めます。困窮している母子家庭の生活、在日コリアンとしてのルーツ、対人関係のつくりづらさ、被差別部落との関わり、性的少数者として、今は話したくない「いじめられた」辛さなど、一つひとつとても重い、大切なことが語られ、書き込まれてきました。少しずつ信頼関係が深まり、安心感が芽生えはじめてきました。

後期授業の最後の２回のテーマは「いじめ」問題で、最終回は「いじめ問題と私」のテーマでグループトークをしました。予告していたものの、実は不安でした。誰にも言わないと決め、これまでずっと心の奥底にしまい込んできた思いを話してくれる人がきっといるにちがいないと信じる一方で、しっかり受け止めようという真剣さが周りの人に希薄だと、話そうとする気持ちがくじけてしまわないかと心配する気持ちもありました。

「今日の授業は正直辛かったです。『いじめ』について語るというのは正直辛かったです。思い出したくないこと、思い出すと今でも涙が出そうなこと、これをわざわざ思い出して、人に語ったのは、こ

の授業のみなさんを信頼しているし、私の経験を語ることで、みなさんが何かを感じそしてそれを教師となった後に子どもたちに伝えていってくれそうだと感じたからです。LGBTの当事者であるということを言ったのも同じ理由からです。こんなに自分自身のことを考え、そして周りにも伝えられるようになるなんて、前までの私には想像もできませんでした。・・・」たくさんの学生が、次々に自分を語ってくれました。

信じてよかった、信頼は人を変えます、強くします。たしかに「いじめ」をなくすことは難しい、でも、人を信頼の糸で結ぶこと、この中にのりこえる鍵があると確信できた授業となりました。